

のうち、中心付近の最大風速が毎秒一七・二メートル以上になったものを台風という。一年間に発生する台風は、平均すると約二七個である。月別発生数、九州への上陸数は八月が最も多く、九月、七月がこれに次ぐ。

福岡で観測された最大風速や最大瞬間風速の五位までの値は、すべて台風によるものである。台風が九州のすぐ西側を北上した場合と、強い台風が九州を縦断した場合に記録されている。

台風は熱帯で発生し、多量の水分を含んでいるため、暴風とともに大雨をもたらす。特に秋には、日本付近にある秋雨前線の活動を強めて、大雨を降らせることが多い。

九月になると太平洋高気圧が後退し、「北高南低」の気圧配置となり、日本の南岸には前線が停滞しやすくなる。このため、曇りや雨の日が続く時期が現れる。この前線を秋霖前線あるいは秋雨前線と呼び、この時期はもう一つの雨季である秋霖と呼ばれる。この時期は九州よりむしろ東日本で顕著に現れ、東日本では梅雨季の降水量より秋霖季の降水量のほうが多い。

五 秋

夏に日本付近を覆っていた太平洋高気圧の勢力が弱まって、大陸から移動性高気圧が進んでくるようになると、いよいよ秋本番である。

福岡では十月上旬になると、雨日数が減少して晴れの日が急に多くなる。九月と十月の晴天持続日数は一〜四日くらいが多い。しかし、十月は一〇日以上も晴天が持続することがある。これは、移動性高気圧が帯

状に日本を覆うようになるためである。十月上旬後半から十一月上旬にかけては、一年中で最も晴れの日が多く、スポーツや行楽のシーズンの最盛期となる。

六 冬

暦の立冬（十一月八日ごろ）に合わせるように、福岡では十一月十二日～十六日ごろ最高気温が大きく下がってくる。この時期になると、時々、西高東低の冬型気圧配置が現れるようになる。

十二月も後半になると冬型の気圧配置の日が多く、下旬には本格的な冬が到来する。福岡では日最低气温の低い値は一月下旬から二月上旬に集中する。これは最も寒さの厳しい時期が一月中旬から二月上旬の時期であることを示している。

第四節 平成五年および平成六年夏の異常気象について

一 平成五年夏の異常気象

平成五年（一九九三）の夏は、全国的に低温・日照不足、西日本と東日本の多雨となり、一九五四年（昭和